

かわらばん

妻入り

事務局

新潟県出雲崎町

教育委員会

☎0258-78-2250

FAX 78-4559

盛況だった街並ギャラリー

昨年、十月八日から天領まつりを挟

んだ三日間「街並ギャラリー」を開催

しました。一昨年は、相次ぐ災害の影

響で中止となりましたが、今回は、町

の復興も進み、再び開催することがで

きました。お借りした町屋は、十二軒

のうち九軒に芸大生のスケッチ画六

十点を展示し、三軒に出雲崎にスケッ

チ画を残していった、芸大卒業生で現

在も芸術活動が続けている四人の作

品を展示しました。

また、九月には、「全国良寛会総会」

が当町で開催され、イベントとして、

町屋で文人の書画が展示されました。

昨年の秋は、妻入りの街並は、イベ

ントでたいへん賑わいました。

イベントでご協力いただいた方から感想をいただきました。

「ギャラリー」を経験して

尼瀬 佐藤 悦郎

全国良寛会総会の次の日、二十

五日は、大型バス四台で町外の方

が多くお出でになり、見学される

方を案内しながらの気配りでした。

帰り際に皆さんが素晴らしいと声

を掛けて下さいました。ありがた

いことでした。中でも新会長の長

谷川義明（元新潟市長）様から声

を掛けて頂きましたことは嬉しく

て、思い出に残っております。柏

新時報（十月七日号）の一面に出

雲崎の総合力が発揮されたとの紹介があり、東京の友もその記事を見て故郷を懐かしく思い、喜んでおりました。

十月に芸大院生の「街並ギャラリー」が十月八日から十日まで、

三日間開催されました。十五年度

と今年で二回目の展示でした。町

内の人を始め、町外の方も多くお

出でになりました。私も玄関先に

立ち、お一人お一人に声を掛けて

案内をしたり、お帰り時には、記

帳をお願いしたり、その中でも「水

戸黄門の水戸市から来ました。」と

の声には、びつくりして思い出に

残りました。

町内の方で画を見て色々と話し

に花が咲き賑やかになり、和やか

な空気でした。年々街並も変わり

行く中で芸大生の作品が展示され

ることは、貴重な宝物であると思

っております。

このように、昨年は、二回に亘

り「街並ギャラリー」が展示され、

出雲崎町の存在が町内外の方から

改めて認識された年と考えております。

今後、益々の発展を考える時に放送等と呼びかけてもらい、また、公人の方々の一層のご指導をお願いします。

「街並ギャラリー」からの思い

稲荷町 相澤貞夫

私は、勤めをリタイアして三年

半余りとなります。最近になって、

ようやく町内のことが少しづつ見

えてくるようになりました。例え

ば、それまで街並みと言われても、

認識は、皆無でした。十月の天領

まつりと同時に行われた街並ギャ

ラリーには、初めて留守宅の利用

による展示を行うことができて、

良かったと思っています。来られ



た方々は、展示されている絵と建物を半々位の感じで見入っておられ、更に芸大生と町の方々の長い交流の経過にも感銘を受けておられました。

全国には、様々な街並があり、各々特徴ある造りをした家並みが見受けられます。我が町でも多くの文人が、偉大な足跡を残された町であり、併せて天領の地であったことなどを思う時、この小さな町が「歴史的・文化的な遺産が凝縮された町」と言っても過言ではないと思います。私は、このことをようやく最近、誇りに感じる事が出来るようになりました。

今、町の活性化に思いを致す時、一つの方策として、これらの貴重な財産(資源)をどのように守り、かつ、それを外部に発信していくべきかが、大変重要なことだと思います。そのためには、一つ一つを整理したなかで、皆がそのことに関心を持ち、一つでも二つでも、いろんな分野に参画し、それを盛

り上げていく必要があると思います。

この町に住んで良かったという喜びを共有できることが何よりも大切であり、目的に向かって、根気強く歩んでいく一員でありたいと思っています。

街並ウォーク開催

川西 仲野 隆之

時折、雨の降るあいにくの天気ではあったが、「街並ギャラリー」見学ということ、その雨も気にせず、十二軒の町屋に展示された数多くの作品をじっくりと鑑賞させていただいた。同時に、それぞれの町屋の内部の一端も興味深く拝見させていただくことができた。

どのお宅も外見からは想像できない歴史を感じさせる重厚な構造、空間に目を見張る。改造、改装を施された数件のお宅も現代建築には無い元の構造、間取りを生かしながら現代的な感覚、居住性も併せ持つすばらしい空間に変身して

いるのに感動を覚えた。

展示された芸大生の絵画は、出雲崎の合宿でのスケッチを中心に、卒業生の花鳥の小品や抽象画も加えて、見応えのあるものであった。

この町を描いた絵をこの町並の中で見える。美術館や展覧会で芸術として絵画を鑑賞するのは、全く違った雰囲気と意味を持つ。屏風や衝立、壺や漁具などそのお宅の調度品が展示された作品の実在性を高めてくれる。生活の空間が素晴らしいギャラリーとなる。

卓抜したデッサン力は勿論だが、どのスケッチも歴史の節に掛けられ残った出雲崎、漁師の生活、更には浜の匂い、空気すら伝わってくるものであった。この町の人達と交流する中でこそ得られた画題、対象なのである。

一緒に見学されていた古老から、どこの船小屋かとか、改築されて外見が全く変わっているとか、取壊されて今はもう無いなどとの説明をお聞きし、改めて作者の目の

付け所や感性に感心した。できれば、その場所が何処かの説明や写真でも添えてあると、見る人の興味理解も深まると思うが。

いづもさん宅には抽象性の高い、それもかなりの大作が数点展示されていたが、黒光りした柱や梁、帯戸、漆喰の吹抜けという伝統的な空間の中で全く違和感無く、不思議な調和を作っていた。床の間に掛けられた三枚のパネル画は、現代の三幅対として、また座敷中央の大作は正にモダンな屏風として、ほかの展示場では、恐らくあり得ないだろう存在感を示していた。当主の陶芸作品も含めてお宅全体が芸術空間に感じられ、しばし時を忘れて身を置いた。

八木茂さんや星のまきばさんのところにも卒業生の現在の作品が展示されており、ほかの展示場の同一作者のデッサン力を頭において鑑賞すると、分かりにくい抽象や様式的に感じられがちの伝統的花鳥画にも少し理解が深まった気

がする。できれば、学生時代のスケッチと現在制作している作品を並べて展示し、可能であれば作者のコメントなどが添えられると、画風の変遷や画家の求めているものが興味深く理解できると思う。

毎年行われているこの企画は、町の宝である。今後も長く続き、発展していくことを願っている。

妻入りの街(二十六)

住吉町 磯野 猛

人物往来(十一)

私達の町を訪れた有名、無名の人達は、数え切れないほど多いのですが、有名人となると一番多いのが俳人ではないかと思われまう。そして良寛に憧れて来る文学者や歌人も多く参ります。

大正二年(一九一三)十月八日、出雲崎図書館で講演を行った俳人の高浜虚子は多くの聴衆に感銘を与えたと伝えられています。その夜は、佐藤耐雪さんの家に泊まり、次の日は、耐雪家で句会を行い、

関係した人々に俳句をすらすらと書いてやり、町の人達は、大きな影響を受けたそうです。その夜は、石井町の「魚徳亭」で「高浜虚子先生歓迎会」が開かれ、夜遅くまで賑わったそうです。

虚子は、「ホトトギス」という俳句の雑誌を全国的に広め、日本の俳句集団の指導者として、当時の俳人達にとっては、直接講演を聞くというだけでも、滅多に無いチャンスだったと言われております。

耐雪家に宿泊した虚子は、人力車(その頃、出雲崎では、人力車がありました。)を降りると耐雪さんの家の人々に挨拶を交わし、何やら荷物を出しました。それが大きな大根で「これを夕食の時、大根おろしにして下さい。」と頼んだそうです。耐雪さんは、「先生、大根なら私のところにもたくさんあります。」と笑って受け取られたそうです。

大正十三年(一九二四)九月十一日、二度目の来町の時、良寛

堂参詣が大きな目的でした。その日も、出雲崎の俳句集団『涛声会』が、虚子先生を迎えて歓迎句会を石井町の「ホテイヤ旅館」で開催しました。もちろん、耐雪さんが中心となられたものでした。虚子が良寛堂に参詣したのは、虚子の先生である正岡子規が良寛に関心を抱いていたこともあり、友人の夏目漱石も良寛に心を惹かれていたこと、などを知っていたからです。

このほかにも、この町を訪ねて来る文人は、多くおります。そして何よりもこの町の人達と交わることで、改めて、芭蕉の来た出雲崎、良寛の生まれた出雲崎が旅人の心を捉えるのではないのでしょうか。文学者の相馬御風さんなどは、出雲崎が大好きになり、この土地の人々と交わりました。

この小さな町が、色々な人々を街並の中に招き、迎え、そこからまた、新しいものが生まれ育つのではないのでしょうか。

「大内宿」へ先進地視察
十一月五日、昭和五十六年に国の重要伝統的建造物群保存地区に指定された、茅葺き屋根の並ぶ福島県「大内宿」を視察しました。



先進地視察に参加して

井鼻 松永 信義

かつて、会津西街道の宿場町として栄えた「大内宿」。
以前に読んだ、推理小説の舞台となった場所として、興味を持って参加しました。

当日は、紅葉真つ盛りにして、目的地近くになると大渋滞であった。かなりのロスタイムにて現地駐車場に到着。

寄せ棟造り、茅葺きの大屋根をもつ民家が見えてきた。真つ直ぐな広い街道を挟んで、およそ四十軒、整然と並ぶさまは、不思議な眺めである。江戸時代初期、徳川幕藩体制時、会津藩、米沢藩、新発田藩などの参勤交代の行列が、この宿を往來したと思うと、時代劇の一場面が脳裡に浮かび、この身が三百年前にタイムスリップしたごくの心持ちになった。

さて、好天に恵まれ、三々五々街並の見学に歩き始めた。それぞれの家には、食堂、土産物、地場の野菜、酒等の店を営んでいて、活況を呈している。そのうちの一軒、三澤屋さんにて、漆塗りの大鉢に盛られ、大根おろし、鰹節をまぶし箸代わりに添えられた長ネギを薬味として食する、何とも変わったソバをいただいた。

今、古き良き建物、街並を残して町の活性化、観光客誘致に役立たせようと各地で行われているが、今回「大内宿」の視察に参加させていただき感じたことは、茅葺き屋根の宿場町として、喧伝されているのであるが、トタン葺きに改修している建物が四、五軒見られ、そのことは、屋根材である茅の確保、葺き替え職人、技術の維持、費用等そこに暮らすには、生活様式の変化、社会の現代に貴重な文化財を残すということとは、大変なことなのだと感じた次第です。

大内宿を旅して

石井町 関根 正子

バスを降りたところで周囲を見た。懐かしい古里へ帰って来た想いがしました。茅葺き屋根の家並、その前を流れる小川。秋の色いっぱい身に付けた果物やら野菜を各家庭の軒先に所狭しと並べ売る人、買う人。手作りの木工製品を売る老人、わずかあれだけの区間であ

れ程のことをし、客を招く工夫。

長椅子に腰を下ろしてのお茶とお団子、漬け物の試食。人、人、人の波。この風景が忘れられなくて度々訪れている人もいられる様子。（行き交う人達の会話を耳にして）やはり、この人達も古里へ帰った想いで来られたのだろうか。

私達の妻入りの街並にも、あの様な工夫がなされれば、あの人達の足が、この「良寛誕生の地」へも来るのではないかとも思いました。ほんの一区間でもいい、昔の街並景観を造り、のんびりと、一服できるところを作って欲しい。

そして、そこで面白い物をしながら、隆盛かりし頃の妻入りの街を見たり、聞いたりし、一日ゆっくりコースを計画して、パンフレットを作り地方に配る。観光を兼ねて多くの人達がきてくださることを期待したい。

お天気も良く、終生思い出に残る秋の日の旅を満喫させていただき、ありがとうございました。

あとがき

あけまして、おめでとうござい
ます。

今年の冬は、昨年と違い早くから大雪になってしまいました。

灯油も高く厳しい冬を過ごすには、どうすれば良いのでしょうか？
うまい省エネ方法があったら教えてください。また、車の運転にも気をつけなければなりません。雪道の運転は、毎年経験していても怖いですね。

話しは違いますが、先日、出中の吹奏楽部が東京大会に出場しました。会場は、文京区のシビックホールで行われ、気になったので当日、様子を見に行ったのですが、東京の人たちは、忙しそうに移動しているように思い、出雲崎に帰ってきて「ホッ」としたような感じを受けたのは何故でしょうか。ちなみに、結果は、優秀賞に輝きました。オメデトウ！

石井町 納谷 稔